

史談

2011 (H23) 4・15

■ 地震・津波・原発

—「3・11以後」・断章—

1

古来、時は諸人に等しくして、過ぎたるのちは返ることなし。世に恐ろしきは大地震（おおい）と津波なり。辛卯の年、弥生も十一日の羊の刻、彼岸も近き頃なれど雪、しきりに降りつづく中、突如、大地震来たりて、大地や木々、家々など大きくゆれつづけ、しばし止まず。天がみな落ちるかと思わるるばかりの揺れようにて、人々ただおろおろするばかりにて。立つこともできず。しばし心安かならず。

2

なんとも困ったことになったものである。3月11日の地震と津波、加えて原発の事故のことだが、ほとんど手の施しようがない。原発の事態はどんどん悪化するし、一方で余震が続き、津波の後始末どころではない。自然の力の前では人間はまったく無力であると改めて思う。台風や雪でも同じことが言えるが、ただそっちの方は予報があって多少の準備ができる点が違う。

特に原発からでる放射能は、見えないだけにその恐怖はいかばかりかと思う。「三つ目の原爆」というのもどこかあたっている気がするが、今回は自分の国の中で起こしたことである。「核」に手をつけた人間の思い上がりに対する罰みたいなもので、ふと、キリスト教でいう「原罪」という言葉が頭をかすめる。

いったい、いつから、どうしてこういうことになってしまったのか。考えても頭が痛くなるだけだが、自分が生きてきた時代を考えると人ごとではない。（丸川）

■ 朝日連峰

深田久彌が鮎貝駅に立ったのは大正15年（1926）の7月5日であった。その時の様子を深田は『わが山々』（朝日新聞社）の中に、つぎのように書きとめている。

「ここからいよいよ歩き始める。雲はしきりに動いているが圧えつけるような曇天で、その蒸し暑さったらない。久しぶりで肩にしたルックザックも重たく、歩き始めてから黒鴨まで、約小一里の道には四人とも唸ってしまった。黒鴨の駄菓子屋で冷たい索麵で息を入れて、また歩き出す。ここから中平を過ぎて日影までずっとつづく登り道も暑くて苦しかった。極端にだれてダラダラと歩いて日影へ着いたのは四時半過ぎていた。実際山登りで何が苦しいといっても、麓の草いきれのする夏道ほど苦しいものはあるまい。日影の村を出てしばらく登り道を行くと、やがて気持のいい原っぱへ出た。直ぐ目の前に名前通り尖山が鋭く三角に尖っている。霧のような小雨が降り出し、風も出て来て、やや涼しくなった。尖山の西南の鞍部の鳥小屋峠に着く。小屋があったのでそこへは行ってしばらく休んだ。雨は本降りになって来た。時刻を見ると五時半だ。僕等はここぞとばかりピッチをあげ出した。道は頭殿山の中腹を巻いてついている」

そして、彼らは朝日連峰を縦走し、庄内に抜けて行った。

かつて人々は、山には神が宿ると信じ、信仰で山に登った。また、山は村の生活にかかせないもので、山菜、薪、肥料にする草、建築用材など、山から多くの恩恵を受けてきた。登山と称して山を歩きはじめるのは後年のことである。

一方で山中を貫く朝日軍道は、軍事上、どうしても必要な道であった。

慶長3年（1598）正月10日、上杉景勝は太閤秀吉に会津の国替えを命じられた。越

後国と信濃 4 郡を取り上げられ、会津・置賜 92 万石に、従来からの領国である佐渡 13 万石、庄内 14 万石を合わせて 120 万石の大名となった。ただちに各諸将を軍事的に重要な箇所に配置した。志駄修理亮義秀は酒田東禅寺城主となった。

慶長 5 年 9 月 12 日から始まった最上合戦において、東禅寺城主志駄義秀は最上軍の寒河江、長崎、山辺を抜いて富神山に陣し、長谷堂合戦に加わった。本丸である山形城を間近かにし、最上軍は長谷堂を死守しなければならなかった。膠着状態が続いている中、9 月 30 日、山形に関ヶ原で石田三成の敗報が届いた。同日夜直江兼統は本陣の菅沢山の本陣を引き払い、撤退を命じた。志田義秀は後備を勤め荒砥に退き、朝日軍道を経て東禅寺城に帰った。

上杉領の中で庄内、佐渡は飛地であり、守備の上から弱点を抱えていた。この弱点を補うために、慶長三年夏、兼統の命によって朝日軍道が開鑿された。米沢と庄内を結ぶ最短距離を確保するには朝日の山中を切り開くことであった。

朝日連峰の高度 1000 から 1800 メールの山々を上下する難路で、草岡村を基点として、葉山、御影森山、大朝日岳、寒江山、戸立山、茶畑山、芝倉山、葛城山、猿倉山と、山また山を切り開いて、大鳥川の上流鱒淵に至る 60 キロメートルの区間であった。高島城主春日右衛門忠元は直江兼統の郡代の立場で、軍道開鑿の指揮にあたっている。

(江口儀雄)

■ 神社・寺・百体庚申

この冬の大雪で、皇太神社の鳥居の一部がくずれ落ちた。長い間にコンクリートにひびが入り、劣化が進んだ結果らしい。急きょ神社の木を切って、氏子の人に大きな負担をかけずに、夏のお祭りまでには直したいと考えているという。

そうしているうちに、こんどは寺の屋根の一部が腐り、雨漏りしているという話である。こっちの方は四年計画で、台所の水まわりと合わせて修繕したいという計画が聞こえてきた。一戸あたり、年約二万円の寄付集めが予定されているのだとか。

この寺は若い兼務住職が別の寺にいただけで、ふだん寺には誰もいない。これから誰かが来るという話もないという。それでも無住ではないというらしいが、屁理屈でしかないだろう。寺で葬式をする家もめったにないから、こうなると寺は無用の長物に近い。

もうひとつは上の台の百体庚申である。人の話を聞いて行ってみたら、みごとに倒れていた。地震のせいではないらしく、この冬に積もった大雪が消える時に、石を引張ったものらしい。例年、いくつか決まっていたが、今年はその数六十基あまりで、これも想定外のことらしい。

こちらは地区の役員衆が日を改めて石塔を起す計画をしているとか。それはそれでご苦勞なことには違いないが、これを毎年繰り返さざるをえないのも容易ではない。又、こうしたことに役員以外の一般の人や、若い人たちがほとんど関心を示さないのはどうしてだろうか。

若い世代が地元の歴史に無関心で、どこに何があるかもわからないというのは、大人の考え方の反映といえなくもない。地域の歴史を知ると同時に、何をどう伝えていか。出口がないとはこのことである。(山)

